

がんばれポルトガル

植民地時代の旧宗主国というと、侵略された国からみれば、悔しいけれど大きな存在ということになるのだろう。しかし、この旧宗主国は今に至るまで旧植民地からバカにされ、「哀れな存在」と思われている。

それはイベリア半島のポルトガル。バカにしているのはブラジルだ。この両国の奇妙な力関係は世界史でも稀だ。下剋上ではないが、旧植民地のほうが出世したから、こうしたねじれ現象が起こる。

ブラジルの2013年のGDP（国内総生産）は世界第7位で、人口は約2億人。対するポルトガルのGDPは第48位で、人口はわずか1000万人。しかも08年のリーマンショックからマイナス成長を強いられ、今年辛うじて水面上に浮上するかどうか、だ。

ブラジルのピアーダ（ジョーク）でいつも愚者になるのがポルトガル人だ。紹介したいと思う傑作がひとつ。

——ブラジル人、アメリカ人、日本人、ポルトガル人、ドイツ人らが集まって“世界うそつき大会”が開かれた。最初にポルトガル人が登場し、「昔々ポルトガルに、ある賢人がいました」と言ったとたん審査員全員が一斉に拍手して立ち上がり、最高点を出した——。

ポルトガル語の“逆転現象”もある。日本の外国語系大学の「ポルトガル語科」は伝統的に本国のポルトガル語を教えていた。ところが1990年ごろから日本にブラジル生まれの日系人が大量に出稼ぎ

に来たあたりから、圧倒的に「ブラジル語」が浸透した。

ブラジルの公用語はポルトガル語というけれど、本国とは少し違うことが素人にもわかってきた。大学のポルトガル語科の先生は困惑したに違いない。文法はほぼ同じだが、語尾の「テ」を「チ」と言うブラジル人が多い。プレジデンテ（大統領）はプレジデンチという具合だ。言葉の響きもかなり違う。そこで「ブラジル語」を優先して教えたほうがいい、と考える先生も増えてきた。

ポルトガルの凋落ちようらくといってしまうえばそれまでだが、そう簡単に捨て去るわけにはいかない。

いくら欧州の小国に成り下がっているとはいえ、15～16世紀には世界制覇を狙った大航海時代の栄光の国である。

最近の話だが、世界に散らばったポルトガル語圏の言語ネットワークを強化しようとポルトガル政府が動き出した。

ポルトガル語を使用する国々はポルトガルのほかブラジル、アンゴラ、モザンビーク、カボヴェルデ、ギニアビサウ、サントメプリンシペ、東ティモールだ。この8カ国が1996年にポルトガル語諸国共同体（CPLP、本部リスボン）という組織を創設した。その時以来、この共同体は政治・経済面でお互いに親密な関係を築いている。そして生まれたのがポルトガル語の「正書法協定」である。

アルファベットの文字につく付属記号などを統一しようというも

ので、各国で多少の違いはあってもポルトガル語を守る構えをみせている。

現在のポルトガルはワインとコルクぐらいで、大きな産業がないのが難点だが、1999年のユーロ通貨の第一陣に参加したのがひとつの契機になった。ユーロ圏に入るには国の財政赤字をGDPの3%以内に抑える必要があった。弱小国ポルトガルは信用されず、何度もチェックが入った。

しかしこの機を逃すと国の復活はありえないと考えたグテレス首相（当時）はその条件をクリアした。

当時はブラジルが通貨不安と景気低迷で、職を求めてポルトガルに移る人が急増していた。リスボンで彼に会ったとき「ブラジルを助けるためにできる限りのことをする」と言っていた。ブラジルが困ったら最初に助けるのは旧宗主国ポルトガルだ。

リスボンには、イワシやアジの塩焼きがあるのが日本人にはうれしい。観光客の質問にちょっと恥ずかしそうに答える人々。首都であっても人混みは少ない。そんな町である。日本の大手電機メーカーの元役員がリスボンの郊外に居を構えたことがある。引退後「静かに安心して住める」というのが転居の理由だった。欧州では珍しい「地味な国」である。

そんな国が、その昔インド洋航路とブラジルを発見、日本の種子島まで宣教師を送りこんできた。いつかポルトガルがブラジルを助ける日が来ると思っている。 ●

ラテン語のスーパーパワー

19世紀半ば、ドイツ人のハインリッヒ・シュリーマンはトロイの遺跡を発見し、世界に名を残した。彼はホメロスの叙事詩『オデッセイア』に書かれたトロイは実在すると信じて、発掘に没頭した。

そのシュリーマンには別の顔があった。人呼んで「語学の天才」。18カ国語を解したとされる。しかし筆者は彼が天才だとは思わない。欧州人は普通に生活し、多少なりとも外国と関係する仕事をすれば4、5カ国語は自然にマスターできると思うからだ。

仮にイタリアに生まれたとする。英語とドイツ語を大学と仕事で覚え、フランス、スペイン、ポルトガル語は友人と付き合っていれば、いつの間にか話せるようになる。これでもイタリア語を含め6カ国語である。

ご存じの方も多かろうが、スイスでは国の真ん中あたりで言語が変わる。ロマンシュという土着言語はあるが、大ざっぱにいえば東側のチューリヒはドイツ語圏、西側のジュネーブはフランス語圏だ。こういう国では誰でも多国語が話せると考えたほうがいい。

日本人が言語構造の全く違う英語その他の外国語を修めるときにぶちあたる障壁（ランゲージ・バリア）は、欧州人には全くないのである。

この欧州的言語環境のベースをつくったのがラテン語だ。シュリーマンの「18カ国語」はつくり話に近いと思うが、ドイツ人の彼がラテン語のインフラを利用して、

類似性の強い欧州語への理解を広げていったことは間違いない。

ラテン語はカトリックの総本山バチカンの公用語だ。しかし一般には「死語」の言語で、英国のエリザベス女王が年末演説「クイーンズ・スピーチ」に時折引用することがあるぐらいで、むろん会話は聞いたことがない。でも書いたものを見ると、何となく察しがつく単語もある。特徴的なのは、どんな言語とも関係が深い「普遍性」である。

直接的にラテン語から派生したのはフランス、スペイン、ポルトガル、イタリア、ルーマニア、カタロニア、ガリシア、サルディーニアの各言語だ。発音や表記は異なるが、言語構造が近いので、文法も似かよっている。ともかく「近い」のだ。

驚いたことがある。たとえばブラジルのサッカー選手が教育されたこともないはずなのに、他国のリーグでプレーするときはポルトガル語を使わず、スペイン語やイタリア語を流ちょうにしゃべっていた。ワールドカップ・サッカー日韓大会の優勝メンバー、ブラジルのロナウドもそうだった。

そもそもラテン語とは何なのか。ローマ帝国が征服したギリシャの哲人たちは統制がとれたギリシャ語を読み書きしていた。それに驚いたローマ人たちはギリシャ人から言語を習うとともに、プライドをかけて新言語を創設したとされる。それからラテン語はローマ帝国の公用語となった。ラテンの呼

び名の由来はこうだ。ローマがある州名が「ラツィオ」で、その地域で話される言葉が「ラテン」だったようだ。

ローマは紀元前4世紀から紀元後にかけて「大帝国」になるが、395年に東西ローマに分裂してしまう。しかし言語だけは欧州全域に伝わっていった。

現存するどんな言語もラテン語の影響から逃れられない。欧州をうろつくと、ラテン語のパワーがわかる。ちょっと大げさに言えば、ラテン語系の言語をひとつ理解していれば、ほかのラテン語系言語も想像がつく。「危険」「安全」「良い」「悪い」といった生活の基本言語もすぐわかる。

Digit、People、AM・PM、Computer、Virusなどの語源もラテン語にある（小林標著『ラテン語の世界』中公新書）。そう聞くと、訳もわからなかった言語が身近に感じてくるのが不思議だ。

どうやら、ラテン語は英語の「語源の倉庫」のようなものであるらしい。ラテン系言語だけでなく、英語、ドイツ語など世界中に影響を与えている言語も源流はおよそラテン語に行き着くといえる。ちなみに日本には16世紀半ばの戦国時代に伝来したようだ。

繰り返すようだが、欧州人の「語学の天才」はまともに受け取る必要はないし、日本人は引け目を感じることはない。

（日本ブラジル中央協会
常務理事 和田 昌親）

